

# 老年期を健康に生きる教育ボランティアによる授業の意義 －看護学生と教育ボランティアそれぞれの視点から－

清水昌美, 坪井桂子, 小池香織, 沼本教子

神戸市看護大学

キーワード：老年看護学、地域住民、教育ボランティア、生活史、教育方法

## Significance of Class Given by Educational Volunteer who Spend Healthy Old-age －Analysis of Nursing Students and Educational Volunteer－

Masami SHIMIZU, Keiko TSUBOI, Kaori KOIKE, Kyoko NUMOTO

Kobe City College of Nursing

Key words : Gerontological Nursing, Citizens in Community, Educational Volunteer, Life Story, Educational Method

### 要旨

本研究の目的は、地域で健康に生活する A 氏の授業を受けた看護学生の学びと授業を行なった A 氏の受け止め方を明らかにし、老年期を健康に生きる教育ボランティアによる授業の意義を検討することである。

看護学生の学びについては、授業を受けた80名の学び・感想シートを質的帰納的に分析し、A 氏の受け止め方については、授業後に75分のインタビューを実施し、意味内容ごとに整理した後、語られた内容から授業への参加が A 氏にもたらした意味を解釈した。

学生の学びとして【戦争の時代を生きた A 氏の体験、生き方からの学び】、【高齢者を捉える視点の再考】、【健康に生きることへの探求】、【看護師のあり方と理想の看護師像の具現化】、【自身の生き方への示唆と学習意欲の向上】の5つのカテゴリーが導き出された。授業を行った教育ボランティアの A 氏は、授業の準備から学生からのフィードバックを得るまでの過程で自身の人生を振り返り、過去と現在の自分とのつながりを感じる、自身の価値観の原点に気づく、これまでの人生を肯定的に受け止めるなどの経験をしていた。以上のことから、老年期の教育ボランティアによる授業が、学生の高齢者理解を促し、豊かな学びに結びつくと同時に、授業を行う高齢者にとっても人生の統合を行う一助となり得ることが示唆された。

### I. はじめに

神戸市看護大学は、文部科学省が政策課題への取り組みとして導入した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」を受け、平成18年度より「地元住民と共に学び共に創る健康生活」をテーマとした教育プログラムを作成し、さまざまな取り組みを行ってきた。具体的には、「地域や家庭を基盤とした人々の健康生活を支援する看護実践能力の育成」と「住民主体の健康づくり、まちづくり」を地域住民や行政などと共に図っていくことを目的とし、大学による地域住民への健康支援と地域住民による大学教育への支援を融合させたカリキュラムの構築を図り実践してきた。その取り組みの1つとして、地域住民が教育ボランティアとして参加する授業の展開がある。老年看護学教育

においても、老年期を健康に過ごしている地域住民をゲストスピーカーとして招き、ゲスト自身の生活史や価値観などの語りを授業に組み込むことで、高齢者の健康生活支援のあり方を考える一助となるように働きかけている。

前述した教育の背景には、我が国の少子高齢化や世帯構成の変化がある。平成24年10月1日現在の高齢化率は24.1%と過去最高となっており、高齢者のいる世帯構成では「三世帯同居」が減少し、「夫婦のみ」、「単独」世帯がその半数を上回っている（内閣府, 2013）。このような現状において、看護学生は日常的に高齢者と触れ合う機会が少なく、それが高齢者に対する偏ったイメージや看護の対象としての高齢者理解の難しさにつながっていると考えられ、看護学生の高齢者理解を深めるために、さまざまな研究的取り組み

が行われてきた（樋口ら, 2013）。

張ら（2012）は、元気高齢者による授業が学生の高齢者に対する肯定的なイメージの付与に寄与できると考え、老年看護学概論の一環として元気高齢者による授業の導入を試み、学生の高齢者観や老年看護観の育成に貢献しうることを示している。この結果は、本学の教育ボランティアによる授業の教育的意義を支持するものと考え、一施設による試みであるため、さらなる研究成果の蓄積が必要と考える。また、看護学生が、成人期・老年期にある人へのインタビューを行った伊藤ら（2006）の研究でも、学生の対象理解が深まったことが報告されているが、このような研究報告は、その目的から学生にとっての教育効果や意義のみに焦点が当てられている。

先に述べた本学の現代 GP の取り組みは、テーマに示すとおり「共に学び共に創る」ところが特徴である。その意味では、授業の受け手だけでなく行う側の意義についての検討も必要と考える。人生の最終段階にある老年期は、自己の人生を振り返り、自我を統合する時期である（Erikson, 1982）が、そのような発達段階にある高齢者が授業に参加し、自らの体験や価値観を学生に語るという経験は、参加者自身に何らかの意味をもたらしているのではないだろうか。

以上のことから、本研究は地域で健康に生活する A 氏の授業を受けた看護学生の学びと授業を行なった A 氏の受け止め方を明らかにし、老年期を健康に生きる教育ボランティアによる授業の意義を検討することを目的とする。これらを検討することは、これまで本学で行ってきた教育ボランティアによる教育の意義を示すことに寄与できると考える。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン：質的記述的デザイン

### 2. 研究協力者

平成25年度2年次前期に実施した「老年健康生活支援論」における教育ボランティア（A 氏）による授業の受講者のうち、研究協力の同意が得られた学生および授業を行なった A 氏。

### 3. 授業の準備と方法

1) 教育ボランティアである A 氏に、「健康に老いる：健康に生きる高齢者から学ぶ」というテーマで90分の授業を依頼した。具体的には、「1. 私の人生の歴史」

として生まれ育った時代、生まれ育った家族、戦争体験、結婚、仕事などにまつわる A 氏の生活史、「2. 私が大切にしていること」として『いまを生きる』生き方、健康のために大切にしていること、仕事と健康、「3. これからの人生」としてこれからの人生に対する希望や期待、若い人たちに伝えたいことを柱とした授業を依頼した。A 氏が生活史を整理するにあたり、研究者らが独自に作成したライフイベントとそれに対する反応や対処を記述するためのシートを提示し、その記入方法を説明した。また、生活史にまつわる写真を預り、授業に使用するパワーポイントを教員が作成し、事前に授業の流れや方法の打ち合わせを行なった。

### 4. データ収集

授業の受講者には、授業資料とともに「学び・感想シート（A4用紙1枚）」を配布し、授業の学びや感想を記述して1週間後に提出するよう依頼した。「学び・感想シート」を研究の資料として活用してよいかどうかは、「研究同意のためのアンケート用紙」にて確認を行った。A 氏には、学生が提出した「学び・感想シート」を送付し、授業のフィードバックを行うとともに、授業を通して学生が学んだことをまとめ、資料化したのち、60分を目安にインタビューを実施した。インタビューは A 氏の許可を得て録音した。

### 5. データ分析

学生の自由記述から、A 氏の授業で学び取ったこと・感じ取ったことを含む文節を抽出した。その後、抽出した文節を意味内容ごとにコード化し、コードの共通点や相違点に注目して比較分析することによりカテゴリーを生成した。A 氏へのインタビューは、逐語録を作成し、授業への参加に対する A 氏の受け止め方に関する語りを抽出し、文脈を切り離さないようにして意味内容ごとに整理した。その後、語られた内容から授業への参加が A 氏にもたらした意味を解釈した。研究結果の厳密性を確保するため、分析過程において研究者間で合意が得られるよう、意見交換やその後の内容確認を行った。

### 6. 倫理的配慮

研究協力者に対し、研究目的と方法、参加は自由意思に基づくものであること、個人情報保護に努めること、本研究以外の目的には使用しないことなどを文書および口頭で説明した。学生に対しては、研究協力の有無が成績に直接結びつくものではなく、その後の

教育を受ける上でも不利益を被ることはないことを説明した上で、研究協力の可否を「研究協力のためのアンケート用紙」に記入してもらい、同意する者のみ氏名を書いてもらうようにした。同意が得られた学生の「学び・感想シート」は、個人が特定されないよう匿名処理をした後に分析作業を行った。A氏に対しては、氏名の匿名化やデータのパスワード管理および速やかな破棄について説明し、承諾を得た。

### III. 結果

#### 1. 研究協力者の概要

A氏の授業に出席した学生数は84名であり、うち研究協力が得られたのは80名であった。教育ボランティアのA氏は、本学の近隣に住む80歳代の男性である。A氏へのインタビュー時間は75分であった。

#### 2. A氏の授業を受けた看護学生の学び

分析の結果、5の 카테고리、16のサブカテゴリが抽出された(表1)。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを< >, コードを「 」で記す。また、コード内の( )は、筆者が補った言葉である。

##### 1) 【戦争の時代を生きたA氏の体験、生き方からの学び】

このカテゴリは、<戦争の辛さ、恐ろしさを後世に語り継ぐ責任>、<戦争の時代と平和な現代の環境や生き方の違い>、<戦争の時代を生き抜いたA氏の言葉の重み、尊さ>の3サブカテゴリからなる。

学生は、A氏の戦争体験から「戦争は本当に人を変えたり、辛いものだ」と改めて学んだ、「自分たちの後の世代に、自分たちの世代が伝えていかなければならない」と、<戦争の辛さ、恐ろしさを後世に語り継ぐ責任>を感じるとともに、「今の若者より戦争中の若者の方が、生命力が強いと感じた」、「自分の19年間とAさんの19年間では全く濃さが違うと感じた」など、<戦争の時代と平和な現代の環境や生き方の違い>を感じていた。そして、「辛い経験を乗り越えてきたという話を聞くと、Aさんがこの場で自分たちに話をしてくれたことがとても尊いことのように感じた」など<戦争の時代を生き抜いたA氏の言葉の重み、尊さ>を感じていた。

##### 2) 【高齢者を捉える視点の再考】

このカテゴリは、<祖父母への関心の高まり>、<生活史に裏付けられた価値観への気づき>、<偏

た高齢者の捉え方への気づき>の3サブカテゴリからなる。

学生は、「Aさんの話を聞いていろいろ考えさせられたり、自分の祖父母の話を思い出した」、「祖母や祖父の人生について、また話を聞いてみたいと強く思った」など、<祖父母への関心の高まり>を表していた。また、「楽しみよりも、挫折と苦しみの方が多かった人生を生き抜いてきたからこそ、自分の関わったことには手を抜かず、できる限りのことをしようという意識を持ったことがわかる」と、<生活史に裏付けられた価値観への気づき>を得ていた。さらに、Aさんの言葉やほつらつとした様子から、「自分がどれほど人を型にはめて見てしまっていたのかを思い知らされた」、「高齢者の人たちを1つのグループとして考えるのではなく、一人一人が違う身体、精神を持っていることをしっかりと理解し、行動することが大切だと感じた」など、<偏った高齢者の捉え方への気づき>を得ていた。

##### 3) 【健康に生きることへの探求】

このカテゴリは、<健康に生きること、健康に老いるためのヒントの獲得>、<健康に生きることの意味を再考>の2カテゴリからなる。

A氏の授業を通して学生は、「他人のために自分には何ができるかを問い、行動に移し、それを生きる糧とできること、それこそが健康に生きるために必要なことだと思う」、「健康に老いるためには、Aさんのように心の支えとなる言葉や、自分が夢中になれること、趣味を見つけて生きていくことが必要」など、<健康に生きること、健康に老いるためのヒントの獲得>をしていた。また、「何か生きがいを感じながら生きることが、健康に生きることだと思った」、「健康とは、自分と向き合うことでもあると思った」など、<健康に生きることの意味を再考>していた。

##### 4) 【看護師のあり方と理想の看護師像の具現化】

このカテゴリは、<自分になりたいと思う看護師像の広がり>、<看護師が心を開く大切さへの気づき>、<患者・家族の心に寄り添い信頼関係を築く大切さへの気づき>、<高齢者を生活史を持った一人の人として捉える必要性への気づき>の4サブカテゴリからなる。

学生は、A氏が授業の中で語った自身の数度にわたる入院体験とそこで出会った看護師の話を受けて、「『自分になりたいかったのはこんな看護師だ!』と自分

表 1. A 氏の授業を受けた看護学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例）
戦争の時代を生きた A 氏の体験、生き方からの学び	戦争の辛さ、恐ろしさを後世に語り継ぐ責任	戦争は本当に人を変えたり、辛いものだ改めて学んだ 戦争体験の話を聞くたびに、次の世代にどんどん伝えていかなければならないと感じる。体験した人の話を、その人の言葉を語り継いでいくべきだと思った 自分たちの後の世代に、自分たちの世代が伝えていかなければならないという責任感を感じた
	戦争の時代と平和な現代の環境や生き方の違い	今の若者より戦争中の若者の方が、生命力が強いと感じた 苦しい戦争の中での生活の話を聞いて、戦争や結婚の価値観は、今と全然違うように思った 時代背景によっても、考え方や生き方が違うのだと感じた A さんの人生経験について話をきいて、自分の19年間で A さんの19年間で全く濃さが違うなと感じた
	戦争の時代を生きた A 氏の言葉の重み、尊さ	辛い経験を乗り越えてきたという話を聞くと、A さんがこの場で自分たちに話をしてくれたことがとても尊いことのように感じた 戦争時代を生きた中で、多くの親戚や友人を亡くし、辛い思いをした A さんのこの言葉が、今の自分には重い言葉のように感じられた 実際に戦争を体験した方から戦争の話を聞くのは、とても重みがあった
高齢者を捉える視点の再考	祖父母への関心の高まり	A さんの話を聞いて、いろいろと考えさせられたり、自分の祖父母の話を思い出した 祖母や祖父の人生について、また話を聞いてみたいと強く思った 自分の祖父や祖母も、どのような人生を送ってきた、どのような考えや信念を持っているのか気になった
	生活史に裏付けられた価値観への気づき	楽しみよりも、挫折と苦しみの方が多かった人生を生きたからこそ、自分の関わったことには手を抜かず、できる限りのことをしようという意識を持ったことがわかる 挫折と苦しみの多かった人生だからこそ、自分の関わったことには手を抜かず、できるだけことをする大切さがよく伝わってきた
	偏った高齢者の捉え方への気づき	自分がどれほど人を型にはめて見てしまっていたのかを思い知らされた A さんの話し方や表情、雰囲気はとても明るく、はつらつとしていた。高齢者は助けが必要だ、病院や老人ホーム等の施設に入った方がよい、と勝手に思っていた自分の考えを大きく変えていただいた 高齢者の人々を1つのグループとして考えるのではなく、一人一人が違う身体、精神を持っていることをしっかりと理解し、行動することが大切だと感じた
健康に生きることへの探求	健康に生きること、健康に老いるためのヒントの獲得	他人のために自分には何ができるかを問い、行動に移し、それを生きる糧とできること、それこそが健康に生きるために必要なことだと思う 健康に老いるためには、A さんのように心の支えとなる言葉や、自分が夢中になれること、趣味を見つけて生きていくことが必要なのかなと思った
	健康に生きることの意味を再考	A さんの話を聞いていて、自分の人生と向き合い、自分と向き合っているのだなと感じた。だから、健康に生きる方なのだと思った。健康とは、自分と向き合うことでもあると思った 何か生きがいを感じながら生きることが、健康に生きることだと思った 年を重ねるということは、幸せなことも辛いことも味わって、それを乗り越えることなのだなと思った
看護師のあり方と理想の看護師像の具現化	自分がなりたいと思う看護師像の広がり	「自分がなりたいのはこんな看護師だ！」と自分の気持ちに気づくことができた 「看護師さんが(排泄ケアを) 自然に行ってくれたので、恥ずかしさはあまりなかった」ということを聞いて、自分もそんな風に援助できる看護師になりたいと思った 将来、患者さんから、この人にケアをしてもらいたいと思われるような看護師になれるよう、頑張りたい患者とその家族に安らぎを与えられる看護師になりたい
	看護師が心を開く大切さへの気づき	「看護師自身が心を開くことが大切」と（いう言葉）聞いたとき、ハッとした 患者さんの心を開かせようと働きかけるばかりではなく、看護師自身が患者さんに対して心を開いて接する必要があるのだと考えさせられた 患者さんに信頼してもらえるように、心を開いて頼ってもらえるように、自分も心を開いて関わりを持つことの大切さも感じた
	患者・家族の心に寄り添い信頼関係を築く大切さへの気づき	看護師と患者の信頼関係を、普段の関わりの中で築くことが大切なのだなと思った 心に寄り添うためには、その人の考え方、価値観にも近寄る必要がある 自分が患者さんと接する中で心を感じとり、その人それぞれに合った対応が必要であると感じた
	高齢者を生活史を持った一人の人として捉える必要性への気づき	高齢者の方にはそれぞれの歴史があり、性格があり、高齢者の方々を「高齢者」ということだけで捉えるのではなく、一人の個人として捉えなければ、本当の看護はできないと思った A さんは自分が想像もつかないような様々な体験をされていて、他のご年配の方も同じようにそれぞれの生活史があるのだと思った
自身の生き方への示唆と学習意欲の向上	A 氏の生き方、人柄への敬意	勉強することが困難な状態でも自ら食欲に学ぼうとし、自立しようという姿勢は、自分たちの世代も見習うべきであると感じた 多くの時代や出来事を経て、今現在も A さんは夢や目標に向かって人生を全うされている姿は、とても素敵だなと感じた 自分もこういう風に年をとりたと思った
	自分の生き方を省察	「志をいつまでも」という言葉は、「自分は果たして今、志を持って生きているだろうか」と、自分の生き方を省みるきっかけとなった 今、高い志をもち、看護師になろうと思った時の自分、大学に入るまで頑張った自分を思い出し、初心に帰って、もう一度看護というものを見直すことが大切だと、とても感じた
	今後の生き方を熟考	「すべてを他人のために、自分のためには何ものをも」という言葉を聞いて、自分が将来どのように生きていこうか考えることができた 自分自身ははっきりとした「人生の目標」がないため、心の支えになるような目標を探していきたいと思う A さんの話は、自分の生き方を考えるきっかけになった
	努力を惜しまず学習する意欲の高まり	もっと自分に厳しくして、毎日を一生懸命に生きなければならないと思った これからは、自分が関われることに全力で取り組み、自分が持っている能力は最大に発揮して、A さんのように「私は手を抜かず、いつも全力だった」といえるようになりたい 今の「学ぼう！」という志に自信を持って、これからの勉学・生活に励んでいこうと思った



の気持ちに気づくことができた」、「『看護師さんが（排泄ケアを）自然に行ってくれたので、恥ずかしさはあまりなかった』ということを知って、自分もそんな風に援助できる看護師になりたいと思った」、「将来、患者さんから、この人にケアをしてもらいたいと思われるような看護師になれるよう、頑張りたい」など、＜自分になりたいと思う看護師像の広がり＞を表現していた。また、『『看護師自身が心を開くことが大切』と（いう言葉を）聞いたとき、ハッとした」、「患者さんの心を開かせようと働きかけるばかりではなく、看護師自身が患者さんに対して心を開いて接する必要があるのだと考えさせられた」と、＜看護師が心を開く大切さへの気づき＞を得るとともに、「看護師と患者の信頼関係を、普段の関わりの中で築くことが大切」、「心に寄り添うためには、その人の考え方、価値観にも近寄る必要がある」など＜患者・家族の心に寄り添い信頼関係を築く大切さへの気づき＞を得ていた。さらに、「高齢者の方にはそれぞれの歴史があり、性格があり、高齢者の方々は『高齢者』ということだけで捉えるのではなく、一人の個人として捉えなければ、本当の看護はできないと思った」、「Aさんは自分が想像もつかないような様々な体験をされていて、他のご年配の方も同じようにそれぞれの生活史があるのだと思った」と、＜高齢者を生活史を持った一人の人として捉える必要性への気づき＞を得ていた。

#### 5) 【自身の生き方への示唆と学習意欲の向上】

このカテゴリーは、＜A氏の生き方、人柄への敬意＞、＜自分の生き方を省察＞、＜今後の生き方を熟考＞、＜努力を惜しまず学習する意欲の高まり＞の4サブカテゴリーからなる。

学生らはA氏に対し、「勉強することが困難な状態でも自ら貪欲に学ぼうとし、自立しようという姿勢は、自分たちの世代も見習うべきであると感じた」、「多くの時代や出来事を経て、今現在も夢や目標に向かって人生を全うされている姿は、とても素敵だなと感じた」、「自分もこういう風に年をとりたい」と、＜A氏の生き方、人柄への敬意＞を表していた。また、『『志をいつまでも』という言葉は、『自分にはたして今、志を持って生きているだろうか』と、自分の生き方を省みるきっかけとなった』と、＜自分の生き方を省察＞し、『『すべてを他人のために、自分のためには何ものをも』という言葉を知って、自分が将来どのように生きていこうか考えることができた』「自分自身ははっきりとし

た『人生の目標』がないため、心の支えになるような目標を探していきたい』と、＜今後の生き方を熟考＞していた。そして、「もっと自分に厳しくして、毎日を一生懸命に生きなければならないと思った」、「今の『学ぼう！』という志に自信を持って、これからの勉強・生活に励んでいこうと思った」など、＜努力を惜しまず学習する意欲の高まり＞を表していた。

#### 3. 授業を行ったA氏の受け止め方

ここではA氏に行ったインタビューでの語りを記述する。記述にあたってA氏の言葉をゴシックおよび「」で記す。

##### 1) 生活史をまとめて

A氏に「私の人生の歴史」を語るにあたり、生活史をまとめた感想を伺うと、A氏は以下のように答えた。

私振り返るということをあまり好きでなかったししてないんです、今までね。それをする中で、随分忘れていたこととかその時見えてなかったこととかを思い出したり、見えてきたりしたことはたくさんあります。

人生を振り返ることをしてこなかった背景には、以下のようなA氏の過去に対する捉え方が関係していた。

済んだことはもう何を言っても…、あの時こうしておけばよかった、ああしておけばよかった、そういったことを言っても仕方がないんですね。というのは僕の考えなんですけどね。（中略）今あるものの中でできるだけのことをしてみる、そこで何ができるかを考える。だから振り返るっていうことをむしろ拒絶していたような気がします。

しかし、この度生活史をまとめるという作業を通して「あ、違うなと思って、新しい発見をした」という。何が違うのかを問うと、以下のような返答があった。

今の自分っていうものがどういうプロセスを経てできたのか、より正確につかめたような気はします。考え方にしろ何にしろ、今ある自分は過去とつながってっていうか、過去があって今があるんだ。（中略）自分のこういう部分がある時に生まれたのかな、それを基にできたのかなそういう感じですね。

小学生から中学生にかけての戦争体験や占領軍トラックによる父の事故死という体験、その後母親を支えてきた過去を振り返り、今その頃の自分をどのように捉えているかを問うと、「やっぱり肯定的に捉えますね」との返答があった。過去の自分に対し、「自分はそれしかできなかった」と考えるが、その都度自分の置かれている環境の中で何をすべきかを考えて行動してきた自分自身に対し、「後悔はない」という。

## 2) 授業に込められた A 氏の願いと授業後の受け止め方

A 氏は授業の中で、‘今私が大切にしていること’や‘これからの人生’について語る中で、苦難を乗り越えるために大切にしてきた言葉や自身の数度にわたる入院体験で出会った看護師などを紹介し、学生に様々なメッセージを送っていた。その背景にある思いについて尋ねると、A 氏は以下のように答えた。

私の生き方が学生さんの役に立つとは思えないですよ。直接的に学生さんたちに伝えたかったのは、自分の入院体験ですね。(中略) 何回も入院して延べにして1年近く入院したこと、いろんな病院でいろんな看護師さんに出会って、その時に感じた気持ちとか、感じたこととかそういったものが直接的に学生さんたちのお役に立つかなと思って取り上げたんですけどね。

それは、授業を受ける対象者が看護学生であったからであるという。また、以下のようにも語った。

自分の人生を振り返ってみていろいろな困難に直面しました。だから時代は全然違うので、学生さんたちが会える困難とかそういったことは違うかもしれませんが、自分は苦しみはどう乗り越えたかということをお話させていただいたつもりなんです。ここに残っている言葉で自分を慰めたり、自分を納得させたり…、そういうことは時代は違っても学生さんたちのこれからの、少しでも参考になるかなと思って。

実際、授業中の学生の反応や授業後の感想文を読み、どのようなことを感じ、A 氏の伝えたいメッセージが伝わったという実感があつたかという問いに対しては、以下の返答があつた。

(自身の授業の録音を聴いて) 自分の言いたいこと、伝えたいことがきちんと伝えられていない、自分としては説明できてないという部分があまりにも耳について嫌になったんですが、送っていただいた感想文を読ませていただいたら、その中でそれぞれいろんなことを受け止めてくださってたんで、少し救われた気はして。

その一方で、A 氏は学生からの感想文を読んで、以下のような気がかりを残していた。

自分としては『うーん』と考えることがあったんですけどね。(看護師の) 理想の像を伝えすぎたんじゃないかな。おそらく現場に入ってこれをやろうとしたら、ものすごく苦しい大変な事なんだと思うんですよ。それを交えて学生さんたちに押し付けたんじゃないかなという感じはずっとしていただんです。

インタビューより、A 氏の話は実際の体験に基づいたものであり、決して理想像ではないこと、また、

これから多くの実習体験をする中で A 氏の話を相対化していく時間が学生にはあることを伝え、「そうおっしゃっていただいたら少しは…」と、肩の荷を下ろした様子であつた。

## 3) 人生を振り返る作業が A 氏のこれからの時間に及ぼす意味

年表をまとめることによって自身の人生を振り返る作業が、これから生きていく時間に対してどのような意味を持つと考えるかという問いに、A 氏は以下のように答えた。

やっぱり、ないものねだりはしない、できない、受け入れるものは受け入れる。受け入れたその中で自分がしたいこと、しなくてはいけないこと、してみたいと思うこと、現実を受け入れる。そういうものの考え方がいいですか、それを特に意識するようになりましたね。

今まで大変な状況に置かれても、それを乗り越えてきた自身のありかたは、過去からその先も変わっていないという感覚なのか確認すると「そうですね」と答えた。今回の授業はそのような自分を確認するよいチャンスと受け止められているのか問うと、以下の返答があつた。

ほんとに役に立ったと思います。もしこういうお話をいただかなかったら、そういったことを意識しなかったと思います。まあ、同じように考え、同じように行動していると思いますけども、ある意味で‘原点’というんですかね、そういったものを意識しなかったと思いますね。

A 氏は、過去を振り返る機会を得て、「いくらでも思い出すことがあるんですよ」と語り、自分史をまとめたくなったということを最後に語った。

## IV. 考察

### 1. 老年期を健康に生きる教育ボランティアによる授業の学生にとっての意義

本研究結果から、学生の学びとして5つのカテゴリーが導き出された。その内容は、授業の目標としていた健康支援のあり方に対する学びにとどまらない広がりを見せていた。看護系大学の1年生の老年看護学概論の中に、元気高齢者による授業を取り入れた張ら(2012)の研究においても、学生の学びとして7つのシンボルマークがまとめられており、学びの多様性という意味では、同様の結果を得ている。この広がり、普段の授業のように大学教員から1つの単元を学ぶの

とは異なり、‘学部教育ボランティアである A さん’あるいは地域住民の方々から学ぶという授業形式による効果と考える。

さらに、その具体的内容を、張ら（2012）の結果と比較すると、本研究で抽出された【高齢者を捉える視点の再考】は、張らの《高齢者へのマイナスイメージの払拭》および《祖父母へのかかわりの反省と意識的な対応への意向》と類似した内容であった。また、【看護師のあり方と理想の看護師像の具現化】は《多様な高齢者の理解と看護の抱負の表出》と、【自身の生き方への示唆と学習意欲の向上】は《理想の高齢者像の描写》および《自分自身の老後不安の軽減と生き方への示唆》と一部類似していた。

一方、本研究で抽出された＜生活史に裏付けられた価値観への気づき＞や＜高齢者を生活史を持った一人の人として捉える必要性への気づき＞といったサブカテゴリーは、本研究に特有のものであった。これは、7 人の高齢者が 10 分ずつテーマを挙げて発表するという形式をとった張らの研究と、A 氏一人の生活史を語ってもらった本研究との授業形式の違いにあると考える。一人の高齢者の生活史を聴くことによって目の前にいる高齢者の捉え方が、個々の性格や現在の生活様式の多様性に留まらず、‘生活史をもったその人’としてより深く人を捉えるに至ったと考える。以上より、教育ボランティアの生活史を整理された資料を基に語っていただく本授業の形式は、偏りがちな高齢者イメージを再考し、個々に異なる生活史を持つ人としての捉え方へと意識を変換することに貢献できると考える。

また、本研究では、看護師のあり方だけでなく＜自分になりたいと思う看護師像の広がり＞が抽出されていることが特徴的である。そこには、A 氏が授業で語った入院体験における看護師のエピソードが深く学生の心に響いたことが窺える。本授業の後に基礎看護学実習を控えた学生にとって、臨床現場の看護師の行動は深い関心事であり、それが A 氏の‘将来看護を担う学生に自身の入院体験を役立ててほしい’という願いの込めもったメッセージと相まって、このようなサブカテゴリーが抽出されたと考える。【戦争の時代を生きた A 氏の体験、生き方からの学び】もまた、A 氏の授業ならではの学びである。このように授業の中で語られる内容や授業を受ける学生の置かれている状況によって、学生の学びの内容が変化し得るのがこうした授業形式の特徴であるが、だからこそ、その内容が

リアリティをもって伝えられ、学生の深い学びにつながるものとする。

## 2. 授業を行った A 氏にとっての意義

授業の講師を務めた A 氏へのインタビューから、授業への参加が A 氏にとって人生の振り返りをする契機となっていたことがわかった。それは、授業に向けて自身のライフイベントを整理したりスライドに載せる写真を選ぶなどの作業を通して自然に行われたものとする。過去のライフイベントをまとめる作業を通して、A 氏は過去と現在の自分とのつながりを感じたり、‘ないものねだりはせず今ある環境を受け入れて最善を尽くす’という自身の価値観の「原点」への気づきを得ていた。また、過去の自分自身の判断や行動についても「肯定的に受け入れる」、「後悔はない」との気持ちを表現することができていた。

沼本ら（2004, 2008）、原ら（2004）は、人生をライフストーリーとして語ることや自分史をまとめるという作業が、老年期における心理社会的健康を維持し、人生の統合を支える看護ケアの一助となることを報告している。このことを考慮すると、授業をするにあたって A 氏が行った授業前の個人年表やスライド作り、そして授業の場は、自分史をまとめたりライフストーリーを語る場としての機能を持ち、それら 1 つ 1 つが人生の統合を行う作業に結びついていると考えられる。さらに授業の場は、単にライフストーリーを語るだけでなく、A 氏自身の大切にしている普遍性のある価値を次世代に語り継ぐ場ともなっており、学生からの授業のフィードバックは、自身のメッセージが伝わったことを確認する機会になっていたと考える。これらの機会を通して A 氏は昔から保ってきた自己一貫性に気づき、自己肯定感をもつことができていたこと、過去を振り返ることを拒絶していたという A 氏から自分史をまとめてみたいという気持ちが湧き上がっていたことから、授業への参加が A 氏の人生を統合する作業の一助となったのではないかと考える。

先に述べた沼本ら、原らは、個人面接あるいは 4 ～ 5 名の小グループによる面接を試みることによって上記の結果を得ていたが、本研究結果から、ボランティア参加による授業という形式を用いて自身の体験を語ることも、老年期の心理社会的健康を維持し、人生の統合を支えるケアとなる可能性が示唆された。本結果は老年期にある A 氏の受け止め方から導き出されたが、他の発達段階にある教育ボランティアについても



同様に、それぞれの発達段階に応じた意義があると考えられる。例えば、本学で乳幼児とその母親を教育ボランティアとして招き、母親に子育ての体験を語ってもらったり乳幼児と学生がふれあう体験を実施した授業では、「自分が地域の役に立っているとの実感」、「他の母親の話を聞くことによる子育てへの学び」、「学生が及ぼす子どもへの効果」などの授業による波及効果があったことが示唆されている（二宮, 2012）。このことは、心理社会的な親密性を確立していく成人前期の母親の発達課題、あるいは親と子の信頼関係を築き上げる乳児の発達課題や自律性を確立していく幼児の発達課題に応じた授業の意義と関係していると考えられ、こうした発達の視点で教育ボランティアとしての意義を捉えていくことが重要と考える。

### 3. 今後の課題

本授業において、A氏にとっての授業参加の意義が発達の視点から考察されたが、学生の学びからは、そのような発達の視点からの学びが明確に浮かび上がらなかった。「老年健康生活支援論」の中には、A氏の授業の前に高齢者の発達段階、発達課題を学ぶ単位があるが、これまでの教育ボランティアによる授業では、授業テーマである「健康に老いる：健康に生きる高齢者から学ぶ」と統合させることを意図していなかった結果と考える。今回は、学生に学んだことや感想を自由に記述してもらうという課題の提示方法をとったが、そこに発達の視点からの考察を促す問いかけをすることで、学生の学びがさらに広がることが期待される。今後は、課題提示方法の工夫が必要である。

本研究におけるA氏へのインタビューは、A氏のもつ価値観や自己一貫性などをA氏と共に確認する機会となった。同時に、「（看護師の）理想の像を伝えすぎたんじゃないか」、「学生さんたちに押し付けたんじゃないか」という授業後のA氏の気がかりを確認する機会にもなった。これまで授業に対するフィードバックは、学生の感想を送付するのみとしていたが、今回、新たに講師となったボランティアが、授業後にA氏のような気がかりを抱いたままになっている可能性があることが明らかになった。そのため、今後は、授業を行ったボランティアが授業に対してどのような受け止め方をしているかを確認するなど、授業後のフィードバックのあり方を検討する必要がある。

## 謝辞

本研究にご協力を頂きました学生の皆様、講師のA氏に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 伊藤良子, 大町弥生, 中山由美他 (2006). 成人期・老年期にある対象の理解—インタビューを行った学生の学び—, 藍野学院紀要, 20, 26-35.
- Erikson EH (1982)/村瀬孝雄, 近藤邦夫 (1989). ライフサイクルその完結, みすず書房, 東京.
- 原 祥子, 沼本教子 (2004). 老いを生きる人のライフストーリー—介護老人保健施設利用者における自己の人生の意味づけ, 日本老年看護学会誌, 8(2), 35-43.
- 樋口友紀, 福島昌子, 竹渕由恵他 (2013). 看護基礎教育課程における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向—2002年～2011年に発表された国内研究に焦点をあてて—, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 8, 89-101.
- 内閣府 平成25年版高齢社会白書 [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.html) (検索日2013.10.14)
- 二宮啓子, 内 正子, 辻佐恵子他 (2012). 小児看護学教育における乳幼児と母親を教育ボランティアとして導入した授業の効果—5年間の学生と教育ボランティアの感想・意見から—, 神戸市看護大学紀要, 16, 59-67.
- 沼本教子, 原 祥子, 浅井さおり他 (2004). 高齢者が支援を受けて自分史を記述することの心理社会的発達の影響, 日本老年看護学会誌, 9(1), 54-64.
- 沼本教子 (2008). 日本老年看護学会第12回学術集会特集：会長講演 人生の統合を支える老年看護の可能性, 日本老年看護学会誌, 12(2), 4-9.
- 張平平, 田中敦子, 大塚眞理子他 (2012). 看護学生の感想レポートの分析からみた元気高齢者による講義の意義. 老年看護学, 16(2), 86-94.